35
ム
531

新作演劇脚本

嵯峨興妖猫奇談

河竹新七作

版權
興行權所有

東京壽永堂出版

No 14530

嵯峨奥妖猫奇談

三幕目　奥御殿碁立の場
庭内庫普請の場

一　盲人又七郎
一　浪嶋大守
一　左官彌太郎
一　同　重吉
一　關　傳六郎
一　近臣
一　同
一　同
一　同
一　茶道純才

一　土こね奴小手松
一　小性
一　同
一　侍

竹本連中

作者　河竹新七

本舞臺一面の平舞臺正面上下三方共白地大形の襖日覆より同じく紋散しの大欄間を飾し向ふ揚幕の所杉戸は出這入り舞臺花道共高麗縁りの薄縁りを敷詰め都而浪嶋家廣間は体爰より○△□▲袴形りの諸士より住居時計は音にて幕明久○イヤ何谷々高い聲でい申され升せぬゞ此程よりして我君が圍碁より勝利を得給ふのいこりや尋常の義でいござらぬ△左樣でござる先頃道具屋久兵衛より納めるなりまあの碁盤へ我々共ゞ向ひ升ると眠氣ゞさして陰より籠り□又我君よりお目ゞさへいつても勝利を得給ふのい全く碁盤ゞ我君のお手傳ひでも致す樣子▲夫故御近習傳八郎殿の存じ付ふて盲人あれば長くお相手も出來樣かと○お客分たる重藏寺はそれゞたみの又七郎殿を殿のお召シと出仕致させ△今日よりして我君の圍碁のお相手致させるい我々共のよき手助々お傍よおゐて拜見致し眠氣ゞさして參つたら▲ゥはりゞゝよお次へ下りゆる〳〵休息致そでおざらうト爰へ向ふより近習一人袴形りおて出てハッ申上升るお召よ依て重藏寺殿只今お出仕よおざり升る○然らば御前へ申上んト此時與よて大守知らせよ及ばぬ聞た〳〵ト正面は襖を明ケ浪嶋大守羽織着流しは殿よて出る是へ小性二人附添ひ能所へ褥を敷キ大守此上へ住居又七郎を案内致せ(近)ハット引返して這入る是より床は淨瑠璃よ成り「程もあらせず次の間より案内よつれて打通る名家の末葉又七郎武門よゐれと盲目の法師よ粧いふ優美は姿遙あゐあたへ扣けるト向ふより又七郎紫の被布をはおり以前は近習よ手を引れ出て來る花道よ下よ居る皆々此体を見て(大)苦しふなひ近ふ〳〵○君はおもるし又七郎殿イザ〳〵是へお進となされい(又七)ぶ眼の身なれば各々方失禮御免下されい「曾釋をなしそ座に着けば大守い御機嫌うるハしゝト又七郎舞臺へ來り下手へ住ふ(大)又七郎よはぶ眼といへどいつよかいらぬ賢固は体手も滿足お思ひおるぞ「他事おき仰せよ頭べをゐゐ(又)コハ難有き其仰せ父か變化の其後よ盲目となる又七郎家督をつぐべき兄迚も不慮の最期よ世を去り升て既よ家名も退轉と覺期致せし其折柄我々母子をあいれみ給ひ家安泰の御沙汰あそ分〳〵公の御仁惠有難ゞ存じ奉り升る(大)イヤ當家の爲よは重藏寺の御身の家は捨難き由緒ある名家もゐいかで疎略よ致されんや又七郎よも盲目とあり嘸かし自宅で氣鬱と存じ勝手の目通りもるしおけば向後疎意なゞ出仕なし圍碁の打手を致してくりやれ(又)性來愚昧の拙者と申シ拙き圍碁よでざり升れば盲人の身のゐん惡く君はお相手致し升るもさそ

かし疎忽の事のミ多くお目まだるくもござり升うが何卒未熟のお手合せは平ラヨ御用捨下さり升う「あひさつ終れハ近習達君は御前へ手を支へ○イザ〳〵君おハ又七殿とお手合せを遊ばし升う(大)ソレ盤石を是へ持て(近)ハッ「ハッと答へてかたへよりかき出す碁盤の四方面碁筒は上代高蒔絵志岐の白石那智の黒すぐりてもへる勝負の席○又七郎殿イザお席へ(又)然らば御免下さり升う「座を定むれば浪嶋の太守も席を進め給ひト諸士手を取て又七郎を碁盤の前へ連行く大守を前へ進み(大)イヤ何又七郎予を日頃より好む道も忘れ年頃圍碁をもてあろべどぶ眼ハ者と圍むハはじめてすべてぶ眼の盲人等が碁將棊なぞを致す時ハまづ盤面をそらんじて打べき手段を意中ヨ辨へ盤上の目ハ忘れ〳〵と差圖致して別人に石をおうとる事かと思ふが足下ハいかゞ致して打ッぞ(又)イヤ左様お義ハ仕り升せぬ未熟おゞらも日頃より聊覺へござり升るもお人手も借りず自身ヨて盤上の目の違ひ升せぬ様お相手致すでござり升う「答へヨ近習ハをとがしがり○イヤ〳〵左様ヨいはるれど將棊と違ひ碁盤の目ハ凡三百六十一△其磐上へ一分一厘違はぬ様に打ふとあさばいづれ手探り心當てヨかき廻さねば相あるまじ□左すれば黒白どつちやヨ成り却ッて勝利ヨ手間取る道理▲それよりいつろわれ〳〵がおハつて石取仕らん「氣遣ふ詞ヨよつゐと笑み(又)ハヽ、各々方のお案事ハ添くはおざれども一トたびおろせし石の上へ重ねて石を置く様でハいかでお相手成升うや其義ヨおゐてハ各々方かおらず御配慮下さるな(大)然らば夫ヨを盤上を得と探ッて心得おきやれ(又)委細承知仕り升る「億を色なく盤面を両の手先に探り見をト又七郎前へ進ミよろしく在て(又)君へ向ひし盤面の右ヨり左へ十九目ゞ又我方ハ左より右へ十九の目ゞあれば則三百六十一目夫ヨ聊おき所を違へ升せぬは幼年より好キヨ凝ッたるへたの一心失禮御免下さり升う「言ッ、盤の縦横を心ヨ得と會得なしイザ〳〵お相手致し升う「黒石取て盤上へハつしと打し身の搆へ心憎くを見えヨける(大)ハテ考のよき其振舞然らば三の四へ打しぞ(又)去らば拙者ハ二石目ハ「十五の三へと置く石ヨ○ヤヽ一分一厘違はぬ定石き「又をや殿がハつしと打チろれと知らせヨ打ッ黒石白もすかさず打ッ石の數ふに行けばたろがれの星もゞくやと打混シ一ト手〳〵ヨ微妙ハ手段並居る者ハ感ヨ絶に片づを呑で予扣へける髮をや取らんと打白石ト此内又七郎と太守碁立ちつて(大)まづ九の一へ予が一目ゞ(又)所を我等が九ハ三へ

「九三目ゞ算五の十五ト兩人石を打居る諸士四人是を見て○跡に十六武藏の手段(夫)又は辨慶影の武者必ず助言さつしやるあ(大)イヤ影辨慶といよき見立テ然らば打手よ薩乃のさしいる手元をまたがりなば(又)烏渡ハヲカケさしやぶる(大)所をワタル九の十四(又)そゐをナサヘて斯ふ打バ「手段をきゞめ打込メばト諸士皆々見て○ヤ、つながる御前の白石へ(大)ハテ是ゝらが勝負じやわへ「手段工風よト床の三重よて道具廻る本舞臺一面の平舞臺うしろ奥庭の遠見下の方に貳間程の土藏の横手を見せ塗壁の心よて足場をあけてあり此所に誂への土船あり上の方一面四ッ目垣是よ秋草の盛りをあしらひ能所に紅葉の立木日覆より釣枝都而庭内土藏普請の体上の方よ前幕の傳六郎革床几に掛見張て居る下手よ前幕の彌太郎重吉好の拵へよそ土藏を塗て居る土ゐぬ奴小手松土を出して居る此見得おいとあぶしれ合方よて道具納る左官二人草臥さるゐなしよて傳六郎れ前へ出て(彌太)お掛りへ申上升御誂れ通り日ゞ暮ゥゝり手元が闇く成升ては無理ゐ仕事を致した所ゐ又明日塗直し升と却て二ざいよ成升ゥら先今日は是迄よてどうぞおひまを下さいまし(傳)イヤ〳〵其義い相成らぬ秋の日わしへ釣瓶落シ七ッを打ば忽ふ暗くなるのへ知れた事だ夫をかこつけ仕舞はれてへ普請ゞゝりの手前が迷惑暗く成たら明りを附けくゞりの所迄塗て歸れ左もおい内へ其方共を歸を事はならぬわへ(運)日の詰つされが知れそ居るから煙草休の八ッ茶さへ呑ずよ仕事をぶつ通シ息をりかずよやり升たから爰らはあなたを達入れて早く歸ッて樂をしろとおつしやつたとてまんざらよ憎い所はおざり升まひ(傳)ヤァ職人ふぜいの分際で身共へ對して無禮ゐ返答夫と申も請負の彌太郎が骨をおしと早仕舞ふ仕たゞるもゐだ明日よりして仕様な二才を運參る事は相ならぬそ(重)誰れがあんゐやゐましひ人遣ひのゐるい屋舗へ手間よ來るやつがある物ゥ(彌)コレ重吉どうしさものだ惡たいをついてはおれが濟ぬへおれゐめんじてイヤサお禮を申て早く歸れ(傳)コリヤ〳〵彌太郎退かて居やれそやりが只今申た事を今一度聞してくりやゝ(重)ヲ、聞たゥりやァ聞せてやらう(彌)エ、口のへらぬへだまつて居ぬへのト此時上手より茶道一人走り出て參り(茶)傳内さま〳〵一寸お出下さり升せ(傳)エ、あはたゝしひ何事だ(茶)あなたが御吹舉なされ升さ碁のお相手の又七郎殿はたくらの癖に考ンが強く御前ンが多分御敗軍故御近習衆が氣をもんで大心配てござり升る(傳)エ、氣の利ぬ左樣

お義なら高が相手いどうめくら聞えぬ様よ助言をしても御前ンゞお勝よなる譯だ(茶)所が向ゐはのんゞよく助言なぞゞ出來升せぬからあなたを呼ンで來てくれと御近習衆がお頼みもゐ早くお出下さり升せ(傳)扨々役よ立ぬ衆達然らば身共がお傍へ參り一目ゞ位ゐいお勝せ申さんト行ゥけて立留りヤイ彌太郎過言を申た其二才捨おくやつではなけれども過急の場合は御用があれば用は濟む迄われよ預ける歸る事は相ならぬぞ(茶)モシ〳〵お早くお出下さい(傳)ハテせわしない只今參る○コレ彌太郎逃しては相ならぬぞト傳六郎茶道よせき立られて上手へ這入る(彌)コレ重吉それだからおのゝりかどんな無理をいわふとも決てかまふあと言ッて置クのに頼ミゞひけぬへ困ッた物だ(重)モシ兄貴どうぞ堪忍しておくんなせへお前に對ゐちやァ氣の毒だがあんな又底意地のわゐひ役人をねへもれて職人あんざァ牛馬ゥ犬猫でも追ひ仕ふ樣よ無理な事斗り言やァがるから此間ゥら癪よさはりなんぞあつたらあいつたをいゞたてやらうと思ッた所けふい腹の虫が承知せぬからあなたい先へ歸つて下せへ(彌)ハテ短氣な事はそゥなと いふよトなだゑる事よろしく道具元へ戻る

本舞臺元の廣間の道具所々よ銀の燭臺をそらし以前は人數殘らず居並び又七郎以前の席よりすこし下も寄りよ住居さしうけ向居る此傍よ傳六郎扣へ居る見得床の送りよて道具留る「猶時移る御座の間よ圍む黒石勝紋とわゐりて悦喜の近習達御前ンよさいめく風情ありト皆々よろしくあゐしあつて○イヤ初めの程いお相手の又七郎殿ゞ勝利かと我々共も存じおつたゞ△さそがい御前ンのお手合せはじめは程いあやうく見せ仕舞よ至り御勝利とは□是ぞ兵書よいへる如く始終の勝を勝となそ▲かしこき君は思召お傍よ居合す我々も一統恐れ四人入ッてござる(傳)イザ又七郎殿お暇出し上ゐらい御前ンお長居い恐れあり早々退出致されい「又七郎い面テをあげ(又)イヤいまだ勝負ゞつき升せぬも之假令お暇出升ても退出い致され升せぬ「居直る体はいぶりしく大守は御合點が行ざれば(大)コリヤ又七郎ゥは異ゐ事を申出そゞ近習の者の見る前ゐて詰碁となり〳〵盤面よそちゞ二石の負とおりしい手合せの内覺へあらんろれよ勝負がつかざるとい近頃ひきやうをれんてあらうぞ(又)アイヤ拙者のひきやうにあらず恐れながらあなた樣ゞ御卑怯なるゥと存じられ舛(大)ゐんと申ス(又)サ盲人なりと思召お戯れよて遊ばしなば元より御前はお氣

鬱をあぐさ丸舛るお相手も為勝利も負と座形りを縛ひ退出ッ致そでござり舛うが身不肖ながら重藏寺の家督をつぎし又七郎をひきやう未練と仰せられては御近習衆の手前と申何面目よおゑ〳〵と退出が相成舛うや御存じないと仰せあらば今速あよ又七郎お手合せ仕義を申あゞ恥辱をもゝぐでおざり舛う(大)然らばうれよて申て見よ(又)ハッ殿よもお覺ござり舛うが只今打し石の内正よ三十八手目よ功を成たる其後よつなぎし石をさちれそきまつた七十六手目よしてうをのびゝ何あぎをゆる殿よい以上で二目ゝの御損拙者のあげ濱十三ありと儘よ承知致シおりしがい一目ゝと相成しいろことらあたりの横合より(傳)ヤア(又)サ、それも主君をひたたらよお勝せ申さん其為よお小性衆の仕業ならんと推察致せバ此儘よ濟せてよろしき義てゐればおして詮議は致し舛せぬ但しひきやうと拙者めを恥しめ給ふお心あら盲人なれど又七郎ろれへ造りし盤上の石を双方一手ッゝ、引て潔白立舛うや又い鹿相よあし給ふあサア〳〵〳〵いろゝでおざる御前ン樣御返答が承りたい「いわれて氣の附く大守より侮八郎わ南無三と驚くひかを隠さんとわざと怒りの聲ふりたて(傳)ヤア君のお慈悲で盲目のをたり者なる小二才を家督よ立テさせ御扶助あるそのお恩も打忘れ無禮過言の又七郎御前ンよ吐かぬきり〳〵立テ「下さげよ言はれて又七郎くわつと心もせき立て(又)ヤア奇ッ怪なる其雑言ン先祖の不運よ嵯峨山の領地を上げられ濱島の當家よ跡を領せられ今聊ある手當テを受け客分とおうひつそくなせど世が世てあらば濱嶋の本家に等しきわが家筋汝等如きの差圖をうゞ退出致す身分てない口をうぐんて扣〈てよからう「常よ似氣おき惡口も碁盤に殘る一念め祟りていりす振舞よ太守も御氣色ゝ〈給ひ(大)ヤアいりせておけばよいうと心得先祖の筋目のゝろ〈立テ汝が先祖は虚弱よして武將の命よ應ぜざるゆゑ家退轉よ及びしを以前のよゑをよわが先祖が家を執立遣ハせしを却ッて恨みよ思ふおぞとい返そ〳〵もよつくきやつめが(又)イヤ假令虚弱の産れたりとも數代續きしわが家ゞ今小祿よ苦しむい御身の先祖が惡計も為幕下よ等しき濱島臣下のあしらひ奇怪至極何と相違はあるまひゞな「碁盤よ手をかけ詰寄れば大守は怒りの聲あらゝゝげ(大)ヤアぶ禮なり又七郎そたれ者よ無益の知行取せおくのと予が影なるよ五躰不具なる身をもつて詞を返す不敵あやつ二言ンと申さば手ハ見せぬ予「詰寄る碁盤を打返せば黒白飛んで又七の面脚ハ當り散乱す(又)ヤア投打なそとい卑

性の振舞ひ盲人なりとて扣へんや「太守を目かけ打返せば(大)予よ手向なさぬれひやつ今日よりして重藏寺の家名をけがし愛目を見せ後日は恥をあたへてくれん(又)ナヽけがさばけがせもが一念崇りをなさでおくべきや「のゝしる体よ堪へ兼(大)ヤアぶ禮者めかト拔打よ又七郎を切りさげる(皆々)イヽ、御前様よは(大)最早勘辨相成らぬぞへ「血汐染なすト床の三重よて此人數よろしを見得此道具廻る

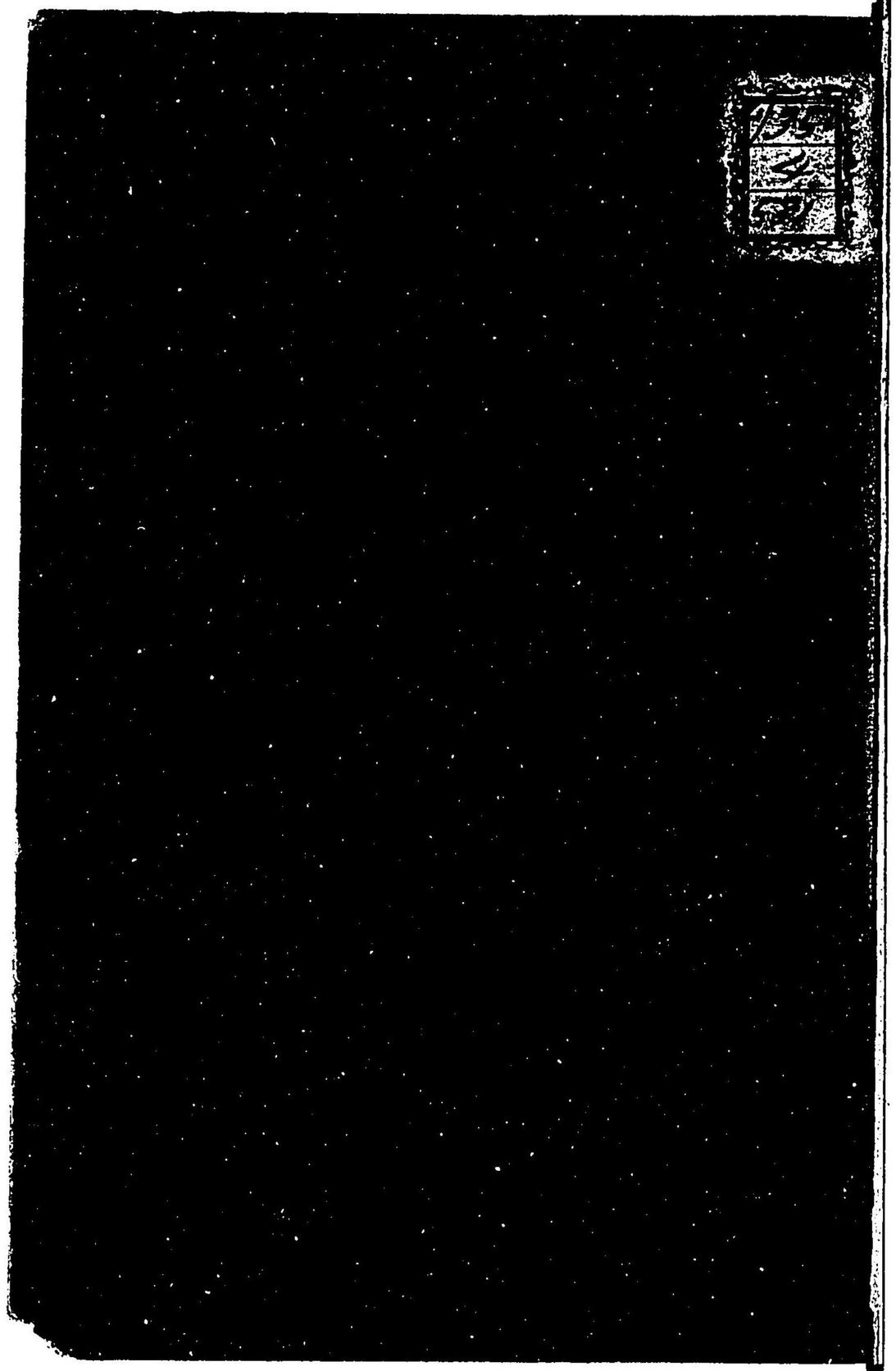
本舞臺元の奥庭の道具爰よ以前の彌太郎重吉小手松あさりを片付け居る小手松は左官やの道具を持て歸り行く(彌)それじヤア重吉おゝゝりか爰へ來たら誤ッてくれ(重)誤る覺へいねへげれど兄貴が困るといひなさるならいま〳〵しいが詫ると仕樣ト此時上手よて人音とるゆゑ(彌)誰か爰へ來る樣だ(重)邪ア丶よあらぬへ樣よあつちへ來いト柴垣の影へ這入る「嘶よあらで小烏の問をさまよふ盲目ゝの手負ひよあやむ又七郎跡を追ひ來る主從が情け白刃のめつた打ト上手より又七郎逃て出るを大守と傳八郎追かけ出て來り又七郎を切る(又)ヤア圍碁の勝負に負たるを無念よ思ひ又七郎を手討よあそとへひきやう至極假令非業よ果るとも魂魄此途よといまつて崇りをあさいて置くべきか「虫の息なる一

昔も此世の暇物そおく大守は猶豫仕給ふを傳八郎はいさをを引け(傳)ヤア恩祿さまはる御當家へ恨みを返そなんぞとい業づをばりのどうめくらあま言ぬかさずをさばつて仕舞へ(又)見よ〳〵おのれの一命も二年と此世へ活ケてはおるぬぞ(大)崇るとあらばたゝつて見よおのれの家も今宵限りあすい浮瀾は扶持放れ母ゲ路傍ふさまよふと當家の罰と思ひ知れ(又)ヱヽせめて最期の此譯を母者人か彌平次よたつた一言知らせたい(傳)活ゆくだけいらぬくり言早くとゝめをおさし遊ばせ(大)ドリヤ島の根を留てくれん(又)ヤア左いふ御身を取殺さん(大)こしやをお事を「今かとゝめと立寄るを拔つくゝりつ這ひ廻る砂よ紅葉の唐紅ゐ血汐は流れ泉水へ落込む音やあらし吹く庭の千草よ音をとむる虫とあはれをろに竹の刀よすがる朝顏はもろさ盛りの草の露明るも待タて消失せたりト此内立廻りありを又七郎落入る上手より以前の諸士四人ぼんぼりを持出て來り此体を見て四人○ヤヽこりやむざんなる御手討ト恟りする」いまれて大守ハ無妙ナ夢今ぞ覺たる御あり さま(大)怒りのあまり切捨しが老臣共よ相知れあば後日は沙汰を事めんとう(傳)とあつて活けおく其時はお家のお爲よあらざるやつお手討ありとも子細なし(大)ソリヤ子細な

いと申か傳御意よりござり舛る(大)シタ此死骸はいかゝなさん(傳)幸ひあれなる土船ニ死骸を載せ我君おゝ御存じなしと仰せあれば今宵のお手討知る者なし又お土藏のお塗かへは當分お見合よ遊ばせ舛う(大)然らバ左樣致す間傳六郎はじめとして今宵出仕の者共一統かならず他言は相成らぬぞ(傳)仰せなくとも爾此通りト皆々金打ウをする(大)サヽ滿足〳〵湯殿へ參り身を清めんト是より下座の謠ひよなり「なれぞ此人夜るは見べて昼見べずト大守先に傳八郎其外諸士四人附イて花道へあゝる是よて道具半廻しよ成る本舞臺一たんの奥庭は遠見正面の土藏の横手上手よ成る爰よ以前の彌太郎重吉柴垣の影ニ隱れ居る「時にふしぎや庭の面も俄ニ風の吹おこりトぼん燈りの明り消えてどろ〳〵ト成り土藏の壁へ座頭は影寫る花道の諸士是を見返り皆々ヤヽあの人影ハト此盤よ重吉彌太郎飛りして下よ居るを木のもしら大守は氣をかへて(大)つゞけ〳〵(皆々)ハット下座の太鼓謠ひよて皆々向ふへ道入る留の木よてシャギリ

明治二十一年十二月廿七日印刷
明年二十一年十二月廿八日出版　（定價五錢）

著作者　淺草馬道町二丁目十二番地　竹柴金作
發行者　日本橋區蠣殼町一丁目三番地　齋藤長吉
賣捌所　本所區南二葉町三十一番地　吉村系
印刷者　日本橋區新右衛門町十番地　町田宗七



088559-000-0

特52-611

嵯峨奥妖猫奇談

竹柴　金作／著

M21

DBJ-0218